第３９回（令和８年度）

「国際交流・国際理解のための小中学生に

よる作文コンクール」

入　選　作　品　集



令和８年１１月

公益財団法人小佐野記念財団

もくじ

目　次

入選作品一覧

賞（部門）	題名	学校名・学年	氏名	ページ
最優秀賞 中学生の部	言葉は自分の「道具」	甲府市立富竹中学校 3年	林　咲月	4
優秀賞 中学生の部	言葉をこえて、心を繋ぐ	北杜市立甲陵中学校 2年	佐藤　優月	8
優秀賞 中学生の部	小さな一歩	北杜市立甲陵中学校 3年	植松　千晴	10
佳作 中学生の部	小さな出来事がくれた宝物	北杜市立甲陵中学校 2年	末木　聖歌	14
佳作 中学生の部	私たちの中に潜む偏見	北杜市立甲陵中学校 3年	中島　心瞳	16
佳作 中学生の部	「好き」がつなぐ、国境を越えた心	山梨学院中学校 3年	根岸　佳孝	18
佳作 小学生の部	「初めての短期留学」	昭和町立押原小学校 5年	三神　裕一朗	22
佳作 小学生の部	「Can I take this badge?」	山梨学院小学校 6年	吉田　惇彦	24

★ ページ番号は、各作品の最初のページです



最　優　秀　賞

中学生の部

★ 言葉は自分の「道具」

甲府市立富竹中学校　3年　林　咲月

★ 最優秀賞　中学生の部

言葉は自分の「道具」

甲府市立富竹中学校　3年　林　咲月

　みなさん、「国際交流」というワードを聞いて、どのようなことを思い浮かべるでしょうか。私は、中学校に入学する前は英語力や自国外の知識、相手の文化に対する理解などの、とても難しい活動だと思っていました。もしかしたら、私の他にも「国際交流」というものをハードルの高いものだと思い込んでいる人が多いかもしれません。私がそのような考えが変わった出来事は、中学生になってからでした。

　私は小学校の頃、「外国語」の授業は嫌では無かったのですが、ALT の先生などの他国の人と関わるのに、多少の緊張がありました。自分は英語を流暢に話せる訳でも無いし、コミュニケーションをとるにはまだ学力が不十分だと勘違いしていたからです。

　中学に入学して授業に慣れてきたある日、英語の授業以外にも他国の転入生がやって来たりと、更に国際交流に触れる機会が増えてきました。私は一度今までの考えを捨ててみて、自ら積極的に声かけや助け合いを試みてみました。すると不思議と、言葉が無くても通じ合えることの方が多いと感じました。日常の他愛ない会話をしたり、お互いの国の文化を紹介したりと、気が付かないうちに国際交流を気軽に行っていたのです。

　世界には本当に様々な人がいます。生まれた場所が異なれば、話す言葉ももちろん、伝統や文化、物事による感じ方だって色々です。自分と違う部分を見つけた瞬間に、苦手意識を持ち遠ざけるのはとても勿体ないことです。幅広いそれぞれの生き方に興味を持ち、自分から理解する行動を心がけましょう。他文化に感心を持ち、知ろうとする気持ちを持つことが「国際交流」に繋がるのです。

　これからの社会では、より一層他国との交流が増え、外国人と関わる機会が増えていくと思います。私が中学校に入る前のように、「国際交流とは難しいこと」という認識がいまだ強いかもしれません。英語が完璧に話せなかったり、他国に対する苦手意識などにより交流を避けてしまう人も、勿論大勢いると思います。文化の誤解や入れ違いにより、今も世界のどこかでは争いや差別が起こっています。そんな今だからこそ、互いを受け入れる力が必要だと思います。「言葉」とは、単なる「道具」に過ぎません。あなたもお互いを尊重し合える社会を目指すために、言葉のかべを恐れず、気軽な挨拶から始めてみませんか？

✿ ✿ ✿



優　秀　賞

中学生の部

★ 言葉をこえて、心を繋ぐ

北杜市立甲陵中学校　2年　佐藤　優月

★ 小さな一歩

北杜市立甲陵中学校　3年　植松　千晴

★ 優秀賞　中学生の部

言葉をこえて、心を繋ぐ

北杜市立甲陵中学校　2年　佐藤　優月

「もっと英語を話せるようになりたい。」そう強く思うようになったきっかけは、小学五年生の夏にカナダを訪れた時の経験である。

私には、日本人とカナダ人の両親を持ついとこがいる。いとこはカナダに住んでいて、毎年夏休みに日本へ遊びに来る。私は、幼い頃から家族と海外旅行に行くことが多かったが、その頃は観光を楽しむだけで、自分から現地の人と話そうとしたことはほとんどなかった。英語でのやり取りはいつも両親に任せ、自分は後ろをついていくだけだった。

しかし、あの夏、私の考えは変わった。夕食に出かけたとき、いとこに「自分で店員さんに注文してみなよ。」と言われた。とても緊張したが、勇気を出してハンバーガーを注文してみた。最初は私の英語が通じず、相手の言っていることも十分に聞き取れなかった。「もっと上手に話せたらいいのに。」と悔しい気持ちになった。しかしその一方で、自分の言葉で伝えて相手が笑顔で答えてくれた時、大きな喜びを感じた。ただ旅行をしているだけでは味わえなかった、「人と繋がる楽しさ」を初めて知ったのである。

現在は、翻訳機やスマートフォンを使えば、外国語ができなくても会話をすることができる。しかし、私はカナダでの経験を通して、自分の口で直接伝えることの大切さを学んだ。完璧な英語でなくても、相手の目を見て話し、自分の気持ちを伝えようとすることで心の距離は近づくのだ。

カナダから帰国した後、私は以前より積極的に英語を勉強するようになった。単語を覚えたり、英語の表現を調べたりするだけでなく、いとこと英語で会話することも増えた。今年の

夏休みには、いとこと英語を使ったカードゲームをして遊んだ。わからない単語が出てきた時には、「What's that mean?」と聞き、新しい言葉を学ぶことができた。外国の人と関わると、文化や考え方の違いに驚いたり、言葉がうまく伝わらなかったりする。しかし、国や言語が違っていても、相手を理解したい、自分の思いを伝えたいという気持ちは共通している。私はそのことをカナダでの経験から学んだ。これからも英語を学び続け、様々な国の人と積極的に交流していきたい。そして、言葉の違いを恐れるのではなく、「違うからこそ知りたい」という気持ちを大切にしたい。カナダで勇気を出して話したあの日の経験は、私に自分から伝えようとすることの大切さを教えてくれた忘れられない思い出である。

今、私には大きな目標がある。今年の冬、一人でカナダを訪れ、いとこの通う高校に一週間体験入学をすることだ。現地の高校生と授業を受けたり、休み時間に話したりして、多くの人と交流をしたいと思っている。もちろん、英語が聞き取れなかったり、自分の言いたいことをうまく表現できなかったり、難しいこともあると思う。しかし、「話したい」「伝えたい」という気持ちを大切にして、自分から積極的に交流していきたい。

★ 優秀賞　中学生の部

小さな一歩

北杜市立甲陵中学校　3年　植松　千晴

今年の夏、私は友達と東京に遊びに行った。子どもだけ、という初めての経験に胸を高鳴らせ、地元とはまるで違う都会の町並みを楽しんだ。そこには私たちのようなたくさんの観光客らしい人々が国内外から訪れており、人の波にのまれそうになるなか私たちは原宿や新大久保などで東京ならではの食べ物を食べたり買い物をしたりして充実した時間を過ごした。普段見ている田んぼや木々とはまるで対極にあるような東京の建物は私にとってとても新鮮で、目を輝かせながら眺めていた。

昼過ぎには渋谷に行った。駅の構内を抜け、しばらくしてあの有名な忠犬ハチ公像と対面したときはとても震えた。すでに外国の方がわいわいと列を作って順に写真を撮っていたので、私たちも加わった。しかしそこで写真はどう撮るべきか、という問題が浮かんだ。私たちが頭を抱えているうちに順番は回ってきて、次が私たちの番になってしまった。悩んでいたその時、ひとつ前の方がこちらへ寄ってきて、「写真を撮ってほしい。」と英語で言われた。上手く聞き取って、快くやってあげたら、その方がお返しに取ってあげようかと言ってくださった。驚きと嬉しさが溢れた。その場の雰囲気でなんとなく雑談をしコミュニケーションもとれ、写真もゲットでき心に残る体験となった。

このことから私が感じたのは、外国の方が想像していたよりフレンドリーだったということだ。初対面の私たちにもぽんぽん話を振ってくれ、話しやすかったし心がつながったような感じがした。最初は私も外国の方に対して怖そうなイメージや近寄りがたいイメージを持っていたのだが実際話してみて楽しい時間を過ごし想像と違っていたのが衝撃的だった。

また、私たちが都会の町並みに目を輝かせていたのと同じように、外国の方もとても楽しそうににこにこしているのを見て、見たことのないものに感動する気持ちは私たちと通じるのだなと考えた。素敵なものを見て感動し、それを楽しむ様子は誰もが持ち合わせているのだから、私たちと彼らとではそういった感動を分かち合えるのではないかとも思った。

きっと私たちはニュースやネットで戦争や政治の良くない部分を切り取って、彼らに押し付け偏った目で見ているのではないだろうか。私もそういう節があったと感じるが、今考えるとそれは個人を決めつける一打にはなり得ないのだとよく分かる。国や地域がそうでも目の前にいる人はその人として存在しているのだ。関わってみないとわからないことがたくさんあるのだと、この経験で実感した。

今は国際的な交流をする機会がとても増えている。私の学校でも、学校単位で交流授業をしている。まずはそのような活動に積極的に参加し、見聞を広めるのが大切だと思う。想像と違う新たな発見が必ずあるはずだ。私も今度地域の国際交流会に参加してみようと思う。こういった小さな一歩が、世界中の人とつながる手段となるだろう。



佳　作

中学生の部

★ 小さな出来事がくれた宝物

北杜市立甲陵中学校　2年　末木　聖歌

★ 私たちの中に潜む偏見

北杜市立甲陵中学校　3年　中島　心瞳

★「好き」がつなぐ、国境を越えた心

山梨学院中学校　3年　根岸　佳孝

★ 佳作　中学生の部

小さな出来事がくれた宝物

北杜市立甲陵中学校　2年　末木　聖歌

ある日のことだ。私はいつも通り塾に向かうため、駅のホームで電車を待っていた。すると、「この電車は韮崎駅に行きますか。」と後ろから少したどたどしい日本語で話しかけられた。私は声をかけられたことに驚いて後ろを振り返ると、背の高い外国人の男性が立っていた。私は一瞬緊張したが、「きっと勇気を出して声をかけたに違いない」と思い、できる限りの笑顔で「はい、行きますよ。」と答えた。彼はニコッと笑って「ありがとう。」と言い、電車に乗った。

車内に乗り、私と彼は一つ席を空けて座った。少し気まずさを感じたが、私は塾の課題を進めるため、英語のテキストを開いて問題を解いていた。すると、問題に詰まっている私を見て、彼が「ちょっと見せて。」と英語で話しかけてきた。驚いたが、彼は私とアイコンタクトをとり、問題を指しながら、私がどうしてもわからなかった部分をとても丁寧に教えてくれた。彼は私にわかりやすい解説をしてくれて、私は周りに迷惑がかからない程度の声で「ありがとうございます。」と感謝を伝えた。国籍も使う言語も違うが、二人で意思疎通をすることができたのがとても嬉しかった。

数分間問題の解説をしてもらった後、私は何気なく気になって「ご出身はどこですか。」と聞いてみた。彼は笑顔のまま「ロシアだよ。」と答えた。

彼からロシアと聞いて、私は一瞬身構えてしまった。原因は現在もまだ続いているロシアのウクライナ侵攻だろう。私はこれまで、ロシア人に対して冷徹で怖いイメージを抱いていた。しかし、彼は初対面の私の質問に親切に答えてくれ、わからなかったところを笑顔で答

えてくれたのだ。そんな彼は私が抱いていたイメージとは違い、とても温かい方だった。

これをきっかけに、自分の中にあった勝手な思い込みがなくなった。私は国やニュースなどの情報だけで「こんな人だろう」と思い込み、「本当はどうなんだろう」と相手を自分から知ろうとしなかった。

その後も彼と少し談笑をし、笑顔で「勉強頑張ってね。」と言って彼は電車を降りていった。ほんの十数分の出来事だったが、今でもこの経験は私にとってとても大切な思い出だ。きっと大人になっても忘れることはないだろう。

この偶然の出来事は私に大切なことを教えてくれた。世界中には数えきれないほどの独自の文化や言語、宗教などがあるだろう。私はこの経験から、将来もっと様々な人と交流をしてみたい、という夢ができた。そのために必要なのは、相手をはじめから決めつけるのではなく、真摯に向き合い知っていくことだ。自分勝手な思い込みを捨て、リスペクトし合いながら関わっていくことこそが、世界中の人と心を通わせる第一歩なのだと、この経験からもらった宝物だ。

✿ ✿ ✿

★ 佳作　中学生の部

私たちの中に潜む偏見

北杜市立甲陵中学校　3年　**中島　心瞳**

私は小学生の頃、ハーフの親友がいた。彼女の家にたくさんお邪魔し、お母さんにもお世話になった。お母さんは外国人で、穏やかな人で私にとても優しくしてくれた。

ある日、車に乗せてもらったときのことである。詳しい経緯は忘れてしまったが、そんなお母さんが声を荒げたことがあった。車窓から見えた家の近所に、外国出身らしき大柄な男性がいた。私はその人を見て「怖いな、襲われたらどうしよう」と呟いた。深い意味はなかった。しかしそれに対して、お母さんは咎めた。「そんなこと言っちゃいけません。外国の人だっていい人はたくさんいます」と。その出来事が衝撃的で、今でも私の頭に残っている。

そのお母さんは、なぜあの場で声を荒げたのだろうか。私はあの後しばらく考えていた。一つは、当時コロナが大流行した後で、彼女の母国で「外国人は出て行け」とひどく罵倒されたと親友から聞いたことがある。それはお父さんのことだったが、外国籍だからと責められた経験が彼女を苦しめていたのではないか。二つ目は、コロナに関わらずさまざまな偏見に出会ってきて、同じような境遇の男性に感情移入したのではないか。

私は当時、自分が外国出身の人に偏見を持っている自覚はなかった。しかし、自覚なく悪意のある言葉を呟いていて、自分が偏見に染まっていることを知った。親友のお母さんは、まだ私が幼いうちにそのことを知るきっかけを作ってくれた。あのまま今に至っていなくてよかったと思う。

近年、日本の外国人労働者や観光客が増えている。人手不足の解消、観光業の発展など良い面がある一方、治安やマナーに対する不安の声も上がっている。しかしそれは、外

国の方が悪い人ばかりという意味だろうか。当然ながら外国と日本とでは文化が大きく異なる。文化が異なれば日本では無礼とされていること、してはいけないことでも許容されている国もあるだろう。それは他国の人々が悪いわけではなく、文化への理解が少ないだけではないか。日本に興味があるから来日しているはずなのに、日本人にとっても他国の人と接するいい機会のはずなのに、お互いを上手く理解できずに悪い印象だけ残してしまう。それはすごく悲しいすれ違いだとは思わないだろうか。

　では、どうすればそれを改善できるのか。私は互いの理解の欠如がこの悪循環の原因だと考えた。そのため、相手を見つめてその文化や価値観などを理解することが重要だと思う。

　私も親友のお母さんが正してくれなければ、今も偏見を持っていたかもしれない。まずは自分の中に潜む、無自覚の偏見を見直してみてはどうだろう。あなたは、目の前の一つの人生を歩んできた人を、「外国人」という言葉で捉えてはいないだろうか。

✿ ✿ ✿

★ 佳作　中学生の部

「好き」がつなぐ、国境を越えた心

山梨学院中学校　3年　**根岸　佳孝**

今年の夏、久しぶりに家族全員が日本に集まった。食卓を囲むと、日本語、中国語、英語が飛び交っていた。父は日本語、母は中国語、アイルランドで暮らす叔母や従兄弟たちは英語を話す。言葉がうまく通じず、身振り手振りで伝えようとする場面もあった。それでも、同じ料理を囲み、顔を見合わせて笑ううちに、言葉の違いは気にならなくなっていた。

そんな賑やかな時間の中でも、特に私の心に残ったのは、従兄弟と大好きなゴジラについて語り合ったことだ。従兄弟も日本のゴジラシリーズの大ファンだと知り、好きな作品や怪獣について話し始めると、時間を忘れて夢中になった。その後、一緒にお台場へ行き、お目当てのグッズを探し歩いた。遠く離れた国で暮らす従兄弟と、共通の「好き」を通して心を通わせられたことが、私はたまらなくうれしかった。

私は日本人の父と中国人の母のもとで育った。母方の親戚も海外で暮らしているため、幼い頃から自然とさまざまな文化や言葉に触れてきた。現在通っている学校も国際色豊かで、さまざまな国にルーツをもつ友人がいる。そのため、私にとって国籍や文化の違いは、ごく当たり前の日常だった。

しかし、ニュースやインターネットに目を向けると、国と国との対立や悲しい事件が大きく取り上げられている。そうした情報ばかりに触れていると、知らないうちに「この国の人はこういう人だ」と、一つの国や文化を固定されたイメージで決めつけてしまいそうになる。

だが、私が実際に接してきた人たちは、決してそんな単純なイメージで括れるものではない。誰にでも、それぞれの「好き」や考え方、夢や悩みがある。笑顔を浮かべたり、大切な

人を思ったりする温かい気持ちは、国籍が違っても何も変わらない。

家族や従兄弟との時間を振り返り、私は「国際理解」の本質に気づかされた。それは、外国の文化や歴史の知識を増やすことだけではない。国籍で相手を判断するのではなく、目の前にいる「その人自身」を知ろうとすることだ。分からないことや違いに出会ったとき、「自分とは違う」と遠ざけるのではなく、「なぜだろう」「もっと知りたい」と一歩踏み込んでみる。その姿勢があってこそ、人と人との距離は縮まるのだと思う。

文化や習慣が違えば、簡単に分かり合えないときもあるかもしれない。それでも、今年の夏、私と従兄弟をつないだのは、難しい言葉や特別な知識ではなく、「好き」という素直な感情だった。これからも、多様な背景をもつ人々と出会ったとき、違いばかりに目を向けるのではなく、その人個人の思いや人柄に向き合っていきたい。

国境は地図の上にあるけれど、人と人との心まで国境で隔てる必要はないはずだ。目の前の「一人」を知ろうとする小さな交流の積み重ねが、国境を越えた理解とつながりを生み出していくのだと信じている。

✿ ✿ ✿



佳　作

小学生の部

★「初めての短期留学」

昭和町立押原小学校　5年　三神　裕一朗

★「Can I take this badge?」

山梨学院小学校　6年　吉田　惇彦

★ 佳作　小学生の部

「初めての短期留学」

昭和町立押原小学校　5年　三神　裕一朗

ぼくは、夏休み中にフィリピンのセブへ短期留学に行きました。英会話教室の仲間と先生で行きました。九日間、英語の勉強をしたり、現地のボランティア団体といっしょに地元の子と交流したりしました。また、現地の様子やくらしを見ることもしました。そのときにぼくが感じたことを書きます。

まず、日本とちがって水道水を飲めないことにおどろきました。ぼくは滞在先でウォーターサーバーの水を飲むようにしました。また、現地では水道の通っていないところもあると学びました。そういうところでは、雨水を使っているそうです。日本は水道が通っていて、飲めることのありがたみを感じました。

次に、日本とちがう種類のバナナがあることにびっくりしました。ボランティア団体のみんなと、丸っこい、甘味の少ないサババナナでフィリピン料理を作りました。バナナを春まきの皮でまいたものを、さとうの入った油であげたおかしです。春まきの皮でバナナをまくのが楽しかったです。味は甘すぎなくておいしいです。そして、さとうがこげてパリッとする食感が良かったです。もし、日本のスーパーで丸っこいバナナが売っていたら買って、フィリピン料理を作りたいです。

また、フィリピンにはたくさんの言語があることも分かりました。フィリピンの人たちはタガログ語と英語を話すのかなと思っていましたが、ちがいました。タガログ語はフィリピンの首都マニラの言葉で、ぼくの行ったセブの言葉とはちがいました。セブやその周辺の島でくらす人たちは、セブアノ語やビサヤ語を話すようです。しかし、それだと別の地域の人と話せ

ません。なので、フィリピンの人たちは英語を話せます。二つの言葉を話せるのはすごいと思いました。

　他にも、別の島に行くときに使った船の形におどろきました。バンカボートというフィリピンの伝統的な船を使ったのです。バンカボートには、アメンボの足のようなアウトリガーという竹の浮きが付いています。それは、船の安全性を高め、波のゆれを吸しゅうします。アウトリガーのある船は、セブ周辺にしかないそうです。船に乗ったとき、アウトリガーのおかげでゆれが少なかったです。

　地元の子との交流では、折り紙でしゅりけんを折ったり、手土産を渡したりしました。しゅりけんの折り方は英語で説明しました。英語が通じたとき、うれしくなりました。手土産は日本らしい和がしやせんべいにしました。とても喜んでくれました。また、地元の子といっしょにアイラブセブを歌いました。英語の歌詞ですが、がんばって歌いました。子どもたちと遊べて楽しかったです。

　セブで英語やフィリピンについてたくさん学べて良い経験になりました。英語がセブに行く前より書けるようになりました。そして、フィリピンの人たちの生活を肌で感じられました。これからは、もっといろいろな国へ行き、そこでの生活を感じてみたいです。

★ 佳作　小学生の部

「Can I take this badge?」

山梨学院小学校　6年　**吉田　惇彦**

初めて僕に向けて、かけられた英語。夏休み前に家族で、兄が部活動で出場するFLLという世界大会に同行して、オーストラリアに行った際のことです。

これまで家族で海外旅行に行く機会があっても、現地の人との会話はほぼありませんでした。僕は、五日間の大会の間、ピットという場所で活動していました。ピットは全約30か国各国の文化で他のチームと交流を深める場所です。各チームに一ブースずつ設置され、それぞれのチームのグッズを交換したり、その国の文化を楽しんだりしました。ピットは本来チームメンバーが活動する場所ですが、本番へ向けての練習で忙しく、保護者がしていることも多くありました。

ここでかけられた言葉が「Can I take this badge?」

もちろんこのくらいのことは分かるので「OK! Here you are.」と返答します。そうすると安心してバッジをとって次のブースへ行ってしまうのです。七夕の短冊やお菓子など準備していたので、日本の文化を楽しんでもらい、交流を深めたいのです。しかし、興味がないのか、やってよいかわからないのか、次のブースにいってしまいます。しかし、文化の交流のためにも興味を引き付けなければなりません。僕はたくさん英語を勉強したつもりではあります。簡単に返答できるつもりでいましたが、咄嗟には口から出てきません。

ここでもっと相手の応答に対して、なるべく正確に臨機応変に話して、仲良くなりたい！と強く思いました。

この大会は他のチームと一緒に新しいロボットのミッションに挑んだり、参加チーム全員

とその保護者でクルーズ船に乗ったり、各国の文化を披露したりと、大会以外のイベントでも各国との交流を深めることが出来ました。クルーズ船では、競技を離れて、ジュースを飲みハンバーガーを食べたり、DJ が流す音楽に合わせて思い思いに体を揺らしたり、季節は冬でしたが、違うチームだからと関係なく、汗をびっしょりかいて楽しい時間を過ごしました。また、他国の人と友達になるなど、とても良い経験をさせてもらうことが出来ました。

この経験を通して他国との交流の大切さについて気づかされました。まずは他国の文化に触れ、普段とは違う視点から楽しむことが出来ました。また、他国の人との会話では、普段分からなかった自分の英語の短所を知ることが出来ました。うまく伝えることができないときもありましたが、片言でもとりあえずしゃべっていれば気持ちが通じ合いました。このようにチャレンジをして、話が通じた時は普段味わえない喜びが沸き上がりました。これからは英語を自然としゃべれるように会話を大切にしながら、もっと勉強していきたいです。また、外国人と話すとなると躊躇しがちですが、これからは積極的に話して自分の能力向上にも繋げていきたいです。

「Just do it!」

第39回（令和8年度）

「国際交流・国際理解のための小中学生による作文コンクール」

入選作品集

令和8年11月　発行
発行者：公益財団法人小佐野記念財団
山梨県甲府市丸の内一丁目6－1
（山梨県 新価値創造推進局内）
TEL055(223)1435

